



Title	『伊勢物語』本文の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	松本, 裕喜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12075号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61591
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuki_Matsumoto_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名 松 本 裕 喜

	主査	教授	後	藤	康	文
審査委員	副査	教授	富	田	康	之
	副査	教授	近	藤	浩	之

学位論文題名 『伊勢物語』本文の研究

「緒言」と「結語」を除く本論文に収められた計六編の論稿のうち、第一章第一節と第三節第一節は査読付き学会誌（北海道大学国語国文学会編『国語国文研究』）に、第一章第二節は査読付き全国誌（京都大学国語学国文学研究室編『国語国文』）に掲載済みであり、残りの三編は書き下ろし（未発表論文）である。

いずれも申請者のすぐれた着眼力と論理的思考能力が遺憾なく発揮された上質の論といえるが、とりわけ第一節を構成する二編は、それぞれの問題に決着をつける卓抜な研究成果と断じてよい。第一節は、従来誰一人疑問視しなかった学習院大学本本文の不審箇所を鋭く見抜き、これが誤写による転化本文であることを周到に論証してみせたもので、学界時評において「「つくも髪」章段冒頭、現代諸注が学習院大学蔵本に拠り「あひえてしかな」とする箇所を「あひみてしかな」と改めるべきだとする。これは広本系諸本、また定家本系の一部にもみられる異文であるが、あくまでも「み」から「え」への転訛についての丁寧な論証を軸とする。妥当な推論であろう」（陣野英則・早稲田大学教授／「リポート笠間」57号）と評価されたのみならず、時評子をして「注釈書の底本本文に手を加えないことを良しとする考え方がある。これは奇妙である。個々の写本の本文を能う限り尊重し、みだりに校合しないという姿勢は支持できる。だが、不審な点についてさまざまな本文の揺れを推理し、校訂案を示すのも斯界の研究者にしかなしえない仕事であろう」とまでいわしめた。また、第二節も、古来難解箇所である「腹に味はひて」が大島本本文のごとき形からの変成本文であることを解き明かした卓論であり、なかんずく「濃き味はひ」が漢語「滋味」の訓読に由来することを突き止めた点に、申請者の並々ならぬ手腕がうかがえる。本論が査読の厳しい全国誌に掲載されたのも当然といえよう。

つづく第二章の二編も秀逸。ともに広本系諸本間の正しい位置づけを図る論だが、共通するのは、肝心な本文そのものの検証を置き去りにした先行研究の姿勢を批判しつつ、それぞれの本文の綿密な分析結果に基づいて新たに広本系諸本の相互関係を策定している点である。細部に関しては疑義を差し挟む余地もあるが、両節ともにしかるべき手続きを踏んで十分妥当な結論に到達している。広本系諸本ないしその本文の研究に新境地を開く貴重な成果として今後注目されることになろう。

最後の第三章には、『伊勢物語』の現存本文がほかの物語作品との交渉ないし接触を

経て形成されたことを論じた二編が配されているが、いずれも申請者のすぐれた本文読解能力に裏打ちされた推理が光る好論となっている。現『伊勢物語』三段の段末注記が『大和物語』を経由して付加されたとみる第一節は、学界時評でも他の若手研究者の論文とともに取り上げられ、「こうして、一つの歌・一つの物語が変容する様を見ると、作品が成立することとテキストが流動することを同じ広がりの中で捉える発想が求められている、と思わずにはいられない」（加藤昌嘉・法政大学教授／「リーポト笠間」55号）と評された。一方、元来は大島本等のごとく「経にける年を」であったはずの十六段有常歌の第二句が、定家本系本文では「あひ見しことを」という不自然な形に変更されている背景に、『源氏物語』帚木巻の歌を想定する第二節については、もっともな推論として従えるものの、ではなぜ、わざわざ歌意を損ねるような改変を定家が断行したのか、その理由を明確に説明する必要があったかと思われる。

以上を総合するに、本申請論文は旧来の『伊勢物語』研究に新風を吹き込むきわめて水準の高い成果といえ、申請者が、これまで誰も手がけたことのない広本系（おそらく大島本）『伊勢物語』の本格的注釈作業へと踏み出してゆく十分な土台たりえいと結論できる。